越中路最東域と越後路最西域
先史期と近代、地形地質がおりなすドラマ

22.01.01to

Ⅰ． はじめに

今回が街道シリーズの最後にふさわしく、越中路東端域の泊、境、上越路の市振から青海までの親不知域が対象である。なぜ最後を飾るのにふさわしいかといえば、富山にとっては京都文化圏の辺境域だからということばかりではなく、越中路と上越路の結節域は日本の東西分断域であり、先史期からのヒスイ交易拠点でもあるからである。こうした特殊性は近代に入っても、関東文化圏と関西文化圏のハザマとして特筆され、今なお大きな影響を文化的にも交易的にも与えている。皆さんご承知のとおりである。

ここでは、上記の観点で、富山文化圏を交易路の視点で捉え、具体的に第一は街道随一の難所、第二は列島を東西二分割の様相、第三には先史期からの交易発祥について論ずることにする。併せて、泊宿や境宿について、その役割をも論じたい。

Ⅱ． 地形･地質

泊から糸魚川までの一帯は地形的には断崖絶壁の長い海岸線を有し、地質的には全国でも珍しいヒスイ岩脈を含む蛇紋岩構成となっている。これは、北中部地域地殻変動の結果であり、太平洋、フイリピン海、北米、ユーラシア、の各プレートがいわば一堂に介することによる特徴的なプレート運動がもたらしたものといえる(付録１参)。以下に詳細を見よう。

1. 地形概要

(1)マクロ的な地形構成

プレート運動の結果として親不知域を含めた中部域北部のいわゆる巨視的地形の特徴は北アルプスが列島の主軸と直交していることである。こうした直交は中部域のみにみられる。

(2)親不知の地形的概要

親不知というと市振から青梅(糸魚川)まで一括することが多いが、実際は以下のように親不知と子不知に分けている。

親不知；北アルプスの連なりがあたかも海に没す
長さ 15km、断崖高さ：300～400m
親不知；市振から歌･外波(親不知駅)まで
子不知；歌･外波集落から勝山(青海)まで

(3)親不知海岸砂浜

一般に海岸崖地形では海蝕台が生成される。当該地では、大河川姫川から運ばれる大量の砂により砂浜が形成されたといわれている。しかし、最近ではダムや砂防堰堤のために、下流に流れる土砂が少なくなり、海岸がかなりやせている。しかも姫川では、下流の河床が著しく低下しているという。

(4)親不知急峻崖面

急峻崖面では長い地質年代においても傾斜が変わらないという。なぜか。親不知には海岸線に沿って(東西走方の)ほとんど直立の断層があり、この層面がはがれても新たな層面が顔を出すといった調子で、急峻さはそのままであると解釈されている。By 竹内章氏(富山大)

2. 地質概要 (図１、後出､付録１)

(1)概要

泊地域から糸魚川まで至る一帯では、15 億年前(古生代初期)の火山岩類や新生代(現代)に至るまでの地層が広く多様に分布する(地層の宝庫)。なぜ多様な地層構成なのか。理由は、列島誕生のダイナミックスがそこにあるからである。すなわち、列島が大陸から剥ぎ取られて東に移動し、その後、列島は中央部で折れ引きちぎられることにより、そこが大規模に陥没しかつ堆積層で埋まって現在の列島がつくられた(付録１参)。その結果、変成作用を受けた元からの地層とフォッサマグナの地層が期せずして併存という多様性を生み出した。

(2)フォッサマグナ

・フォッサマグナの西端は糸魚川･静岡構造線であり、東端は西端ほど明確ではなく、新発田･小出構造線と柏崎･千葉構造線である。大断層付近の山岳領域では火山活動が活発である。

・東端と西単で囲まれる中央部陥没域(フォッサマグナ)は日本列島の大陸からの分離(中新世)以降、広範囲に横たわり、深さ 6000m という途方もない厚さで堆積しているという。

・西端以西や東端以東の地質はどうか。糸魚川-静岡構造線の西側では中生代や古生代の古い地質体が分布しており、泊域の地質もまさにそうである。なお東端以東の地質は省略。

・フォッサマグナについては明治時代にドイツ人地質学者ナウマンにより命名されたという。

図１ 日本の地質 ﾌｫｯｻﾏｸﾞﾅ HP より

(3)蛇紋岩とヒスイ

蛇紋岩は地殻の下のマントルに多く含まれる橄欖岩(ｶﾝﾗﾝｶﾞﾝ)が水を含んで変質したもので、プレート境界付近で起こる広域変成作用の結果としてできる岩石であり、大断層付近に広く分布する。親不知･糸魚川域では、ユーラシアプレートと北米プレートの境界にあり、周辺にはフィリピン海プレートとともに、大規模地殻変動が引き起こされ、糸魚川静岡構造線なる大断層が生起し、蛇紋岩域が広範囲に分布し、併せて蛇紋岩域にヒスイの岩脈を伴っている。プレート境界が中部地方内陸になるので、ヒスイが産出するのは全国ではここ糸魚川だけとなっている。

Ⅲ. 交易と文化、先史期から

親不知広域は、先史期からも北陸各地はいうに及ばず全国に向けた交易の発信地となっていた。交易対象は石斧とヒスイである。みていこう。

1. 蛇紋岩石斧交易　（図２）

古代に使われた石斧。石斧は硬質砂岩で作る場合もあるが、ほとんどは蛇紋岩で作る。理由は、蛇紋岩が適度に硬いので石斧の整形が可能な上に、刃こぼれに際しては刃とぎで再生できるからである。そんな石斧の生産地が境である。境の遺跡では、石斧の製作途中のものを含めて多数の石斧用の石が発見されたという。

蛇紋岩岩脈は前述のように大断層付近にしかなく、北陸地では親不知広域が採掘地であり加工地でもある。ここから、蛇紋岩製の石斧が北陸各地に流通していった。(詳しくは後出Ⅴ.1)

なお、硬砂岩製の石斧が常願寺川中流域で生産されたようであるが、石があまり硬くないので、再生が不可(使い捨て)であったためか、富山県内の極一部でのみ使用されたという。

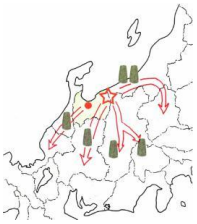


図２　石斧の交易路

2. ヒスイ交易路

ヒスイの最大の産地は糸魚川である。古代、装飾用のヒスイはすべて糸魚川産である。糸魚川産のヒスイが全国の古代遺跡から出土されているが、これは古代から交易が全国レベルであったことを裏付けている。

ヒスイは生産地である糸魚川(青海川と小滝川)から全国にどのように流通していたのであろうか。

(1)中部・北関東・関東方面；姫川をさかのぼり、松本から各地にあるいは上越から各地に、という交易路があったという。

(2)富山･飛騨･関西方面；親不知の浜路が使われていた。また、浜路とは別に青海川を遡り、今でいう上路の方から境に出るルート(親不知のバイパス路)も活用されていたという。

(3)船路；宝石ヒスイが青森三内丸山縄文遺跡において発見された。三内はもちろんのこと全国各地へは船路を使ったといわれている。ただし、使用した船や寄港地は分かっていない。

(4)集落間リレー交易；集落から集落へ、そしてまた集落へといったように隣接集落間の交易(バトンリレー)も考えられるが、浸透拡散的な交易はあり得ない。黒曜石の交易を見れば一目瞭然である。

3. 黒曜石交易　諏訪北にある産地和田峠域から富山への路

黒曜石は、割れ口がガラス状で鋭利なため、ナイフの機能を持ち、あちこちで使われている。しかし、産地は限られており、北陸富山では長野県和田峠域産が使われていた。これは、松本を経て安房峠を通り、神岡から富山に入ったといわれている。この例を出すまでもなく、富山南の山岳の交易路は石器時代からあったのである。石器期や縄文期などでは、平地の川を渡るには難儀すれども、奥地のけわしい山岳路は何なく交易路としていたと考えられる。先史人、恐るべし。

Ⅳ. 親不知域の街道

1. 近世までの街道

時代が下り古代に入って本邦が律令国家になってから、全国各地との連絡路がとして街道が整備された。中国に倣って古代の道では、都内の碁盤上街路や都と他域を結ぶ路も可能であれば直線が基調にされたという。

北陸街道親不知域ではどうか。昔も今も地形は変わらず、300m 程の断崖絶壁が 20km 程続く。しかし、古代から近世では、今よりも海岸の浜部が広かったといわれており、波静かなときには何の問題もなかった。いったん海が荒れた場合には山ルートであるバイパス路が機能していた。

なお参考までに地名「親不知」の由来について；由来には 2 説あり。一つは、自分の身は自分で守るとして、子は親にかまっておられず、親は子にかまっておられず、ということ。今一つは、平安末期、平清盛の弟、頼盛の夫人が荒波で子どもを失ったことを「親不知・・」と歌に詠んだこと。ただし、親不知子不知の地名は平安期以前にはあったという。

2. ルートは三種（写１､図３）

海路と陸路２種の計３種について述べる。

⑴海路；東海道伊勢湾北部域沿岸ルートとは違って、そもそも当該沿岸の海路需要がなく、海路は成立せず。

⑵浜路；親不知域の海岸が砂浜で歩きやすい。

⑶山路；海が荒れた場合のバイパス路。ルートは；

境宿→境川･上路川遡上→上路集落→坂田峠→青海川下り→青海

3. 山の路

(1)コース；このルートは、境宿から境川を遡上、途中から上路川を遡上して、上路集落に入り、そこから坂田峠(標高 600m ｵｰﾀﾞｰ)を越えて、青海川を下って青海の街に出るルートである。ルート総延長距離は親不知のそれの倍であり、また標高 600m 域まで登坂が必要である。このため、多少危険があるものの親不知ルートがそれなりに栄えていたという。親不知ルートが冬場の季節風で通行できないときは、もちろんバイパス路として山ルートが機能していた。

(2)山ルートはもとより繁栄

山ルートには山賊が出て危険のイメージがあるが、実際のところは栄えていた。以下に実状を述べておく。

・境側；境の集落が縄文期から石器の加工工場であり、そこに近い上路域を含めた一帯が原石産出の場所であった。

・青梅側；青梅川流域には、金山(坂田峠付近に戦国期から採掘)やヒスイ採掘場があり、集落は金屋として賑わっていた(金山町は、明治には 3000 人)。金やヒスイは、東国には青梅川を下り、西国には上路経由で、それぞれ運ばれていた。

・上路集落はもとから山姥の里として栄えていた。山姥の子が坂田の金時といわれている(金太郎伝説、全国には五か所)。

4. 近代の街道

明治初期までは、街道は徒歩による浜路通行であった。明

治中期には、崖に這いつくばるように道路が建設され、今はその道路の拡幅や付け替えで国道 8 号線が走っている。そして昭和後期、トンネルと海上橋で当該地を抜けていく高速道路が運用となった。

では今の海岸浜路はどうなっているのか。河川土石流対策で海岸への土砂供給がストップしたために海岸の浜がやせ細り、当時の浜ではほとんどが水没していて、通行不可である。

5. 通行

・平安末期、平清盛の弟、頼盛の夫人が夫の後を追って親不知を通ったといわれている。(前述)

・近世；江戸期の海面は今より若干とはいえ低く、歩行できる広さはあったという。当時の記録によれば、人足が波除で殿様一行を守ったとされている。人足のポジション(水中か砂浜かは不明)もあったということでそれなりの幅員があったといえよう。

・加賀藩参勤交代

浜路利用　　約 2000 人の大移動　→船の調達困難

浜路にて波除人夫 400-500 人で波除人垣(波濤を防ぐ)

海が荒れた場合や山路利用。

・佐々成政の北アルプス越え

ザラ峠ではなく、親不知バイパス路を通った説が浮上。今は平湯安房峠越え説が最有力である。世間では佐々の神格化として北ｱﾙﾌﾟｽザラ峠越えを加賀藩も後押し。

・明治期(1878 年)、明治天皇が行幸の際に

親不知の海岸を避けて山街道を利用した。

6. 親不知浜路の変遷（図１）

路親不知について、現在までの四世代にわたる変遷を記す。

(1)第一世代；海岸浜路

・平安末期；平氏高官が越後に逃げ延びる際に通行という。

・江戸期頃；海水面が今より低く、十分幅広の浜であった。

(2)第二世代

・1878 年、明治天皇の行幸では危険な浜道を避け山路通行。これを契機に、1982 年～1983 年；断崖中腹に新道建設。

・1883 年完成。その後拡幅あり。

1933 年に子不知、1936 年に親不知にて改修工事

・1966(昭和 41)まで使用。

(3)第三世代；1966~現在

ルート変更と第二次改修；拡幅と一部付替(天険トンネル)。

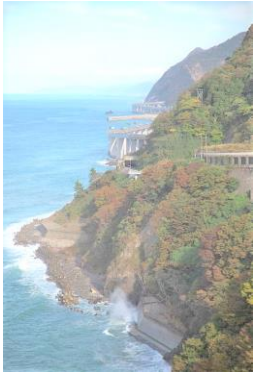
・1968 年；国道 8 号線として整備完了･運用。

旧道はｺﾐｭﾆﾃｨﾛｰﾄﾞとして現存

(4)第四世代；1967 年~現在

・1967 年、北陸高速道開通。

トンネルおよび海上橋にて当該地域を通過。



写１　親不知浜路

親不知 HP より

上左：江戸期

上右：現代､高速路､8 号線、旧路の併存

下：明治期の浜側路

図３　親不知の浜路(‥D‥E‥F)と山路(‥C‥B‥F)

Ⅴ．街道越中路

境は、(北陸街道期における宿場町の面とは別に）先史期からものづくりで栄えた集落である。境を起点に県東部の交易路について述べる。

1. 先史期の文化発信

石器時代に始まった石斧文化が境を拠点として栄えていた。これは、境海岸の海岸段丘上にある境遺跡に石斧の原料が散在していることからしても盛んな石斧加より裏付けられている(節Ⅲ.1 の再記)。また各地の縄文遺跡で石斧が発見されていることから、境の石斧が各地に流通(図２)しており、時代が下ってヒスイ文化(縄文期)の到来においても、石斧とヒスイの交易で、境では集落が早い時期から長きにわたって大規模であったということになろう。

交易路については、境から浜伝いに西側に向い、途中の泊あたりから(県東部の)山ルートに入ったようである。山街道(山ルート)とは、朝日の遺跡から愛本を経て松倉から西へと延びるルートである。富山県上市丸山遺跡(山麓)も山ルートで繋がっており、そこから大山方面に行き、後の鎌倉街道と呼ばれるルートで飛騨にも繋がっていたという。

なお、東方面には、境から親不知の浜を抜け糸魚川から南下して信濃に、さらに東に新潟そして北関東にそんな交易路があったという。

2. 越中宮崎

境海岸の西隣の位置に(泊からなら東へ数 km の位置に)、越中宮崎があり、ヒスイ海岸の町として知られている。越中宮崎のヒスイについては、糸魚川の姫川から流されてきたヒスイが宮崎浜にたどり着いたという説と、宮崎浜沖合にもともとヒスイ原石の岩脈があるという説とがある。未だにどちらなのか、決着はついていない。なお、ヒスイ海岸は越中宮崎から糸魚川までの海岸のこと。

Ⅵ. 宿場　宿場として泊と境

北アルプス北端域が屏風のように立ちはだかる西側直近に境宿があり、少し離れて泊宿がある。辺境の地における宿場町境と平地の宿場町泊との違いを述べたい。

1. 境宿

境は、先史期には石斧生産・加工地であったが、いつしか製塩の街として賑わい、近世に入ってからは、越中の最東端の関所の街となった。

越中と越後の境目においては、交通の要所として越中側にも越後側にも関所が置かれ、越中側が境宿の境関所であり、越後側が市振宿の市振関所である。越後側は幕府の関所であり、高田藩が運営を担当していた。これに対して、越中側では加賀藩の関所として藩が運営し、関所の規模は箱根の倍規模であったといわれている。

なぜ、境の方が箱根より規模が大きかったのか。箱根は人通りも多く、民活故に軍事の面からの防衛危機はさほどでもなかったからであろう。これに対して境の場合、国境警備に重点を置くという名目で加賀藩が威信を誇示したことにより、関所が大規模になったといえよう。

関所の施設をみよう。境関所 HP 資料によると、海上渡航を改める浜関所、街道通行を改める御関所、会場や山中での越境をみはる御亭、御旅屋、射撃場、牢屋、役人長屋などがあったといわれている。関所の陣容は、奉行から足軽まで 60 人。装備は、槍 70、鉄砲 70、弓 30 が備わっており、こうした装備は箱根の倍規模という。

写２　境の関所　境関HPより

2. 泊宿

泊の街の生業は漁業と農業である。地形、近代民主主義、現代街づくりの３点から論述する。

(1)泊宿、地形と街道

泊宿は県東部の端域にあり、地形的には黒部扇状地の東端である。この東端には朝日岳からの源流が黒部扇状地に入り、黒部川分流を奪い取って本川となった。これが小川と称されている朝日町(泊)の川である。

北陸街道については、黒部から泊へのルートは下街道と上街道に二分され、下街道は黒部三日市から入膳、泊を経たルートであり、上街道は黒部三日市から浦山や愛本刎橋を経て舟見から北上して泊に至るルートである。

(2)泊事件（横浜・泊事件）　（文献２）

民主主義が危機に陥った近代日本最大の言論弾圧事件「横浜・泊事件」が発生。粘り強い運動が展開。以下に概略を記す。

朝日町出身の細川嘉六は社会運動を専門にした法学者であり、でっち上げ事件に巻き込まれた。一部始終は以下の通り。

・1942 年、細川嘉六の論文が検閲で問題化。
・細川が地元旅館「紋左」に言論関係の方々を招いた会食時の記念写真が謀議のでっち上げに使用。
・神奈川県特高により細川嘉六をはじめ言論人多数が検挙。
・その後終戦。被告たちは権力を相手に半世紀の戦い。
・2005 年に再審が開始。裁判打ち切りの免訴判決で幕引き。

(3)細川嘉六の業績

1918 年の米騒動について、14 年後(1932 年)、米騒動の詳細を先駆的にまとめた論文によって、米騒動の歴史的意義が確立されたといわれている。

(4)街のいま

・泊は宮崎・境も含めて文化の宝庫といえる土地柄もあって、若者が「消えてたまるか泊の街」として頑張っている。
・料理旅館「紋左」；　本旅館は北陸街道にほとんど直に面しており、宿場では唯一現存する旅館であり、歴史の舞台ともなった。築 150 年ほどの木造建築が歴史の証人として今なお健在である。広間では研究会がしばしば開催されている。
・朝日町は　春の四重奏で有名。空の青、朝日岳の白、桜のピンク、チューリップの赤や黄、の大パノラマで圧巻。

写３　旅館「紋左」

Ⅶ. おわりに

北陸街道越中路最東端から上越路最西端まで、すなわち泊から糸魚川までを、今回ﾊﾟｰﾄ５にふさわしく、地球のダイナミクスと先史期の歴史をおりまぜながら、街道と宿場の生活営みを論じた。以下に気づきをまとめてみる。

・最大難所「親不知」では、浜路と山路が歴史を刻んでいた。
・近代では、浜路にかえて崖壁にへばりつく国道８号線や、その後の高速道路が難所を難なく克服。技術の力は偉大なり。
・境から糸魚川の域では、石器文化や装飾文化(ヒスイ)が全国

展開で交易され、親不知域の越中路・越後路の浜側陸路とバイパスの山路が賑わっていた。

・泊宿では、富山の近代民主主義を息づかせた泊・横浜事件の歴史が垣間見られる。

後書き： 地形地質というといかめしく難ものとなりがちですが、地形地質が交易路を難所とさせる一方で、ヒスイ等の恩恵を地域に授けて交易を確たるものにもしていて、先史期の人々の顔が見えてもきます。近年の道路ではトンネル等の技術の進歩により難所の感覚がまるでないだけに、却って顔の見える歴史を求めて地球のダイナミクスを感ずるならば、先人たちのロマンに浸りながらの「北陸街道を往く」といたところです。皆さんどう感じられましたでしょうか。

謝辞； 本稿は、河川、海岸、土木史、地質、民衆史、考古学、等の専門家との談義を取材材料として活用させていただいた。関係各位に記して謝意を表する。

参考・引用文献

1) 藤田富士夫；縄文期のヒスイ交易路、富山県民ｶﾚｯｼﾞ、1992
2) 金澤俊子；一連の細川嘉六研究
3) 向井善之；富山の民主主義を根幹から揺るがす三大事件「イ病、越中米騒動、泊・横浜事件」、一連の研究

付録1　地殻変動とフォッサマグナ

1. 地殻変動についてのなぜ

日本の中部地域で、おやっと思うこと多々あり。

・なぜ列島が弧になっているのか、
・なぜ日本が(中央域で)東と西に二分されているのか。
・なぜ北アアルプスが列島主軸と直交したのか。
・なぜ日本アルプスが3000m級と高いのか、
・なぜ日本付近でプレートがいくつも交差か。
・なぜ北米プレートが当域までおよんでいるのか、

2. 列島誕生　(図A11、A12)

フィリピン海プレートと太平洋プレートの沈み込みにより、ユーラシアプレート上の大陸の東端部分が大陸から剥ぎ取られた日本原形の域ができ、これが東側に(大陸から離れて)移動。その後、太平洋プレートがフィリピン海プレートのもぐりこみにより、日本原形域は東と西に引き離れ(引きちぎられ)たことにより大きな窪み(フォッサマグナ)が生じた。

なお、北米プレートの働きは十分な解明はまだのようである。1964年新潟地震の時、糸魚川から北東に今一つのプレートの存在がいわれ、後の研究により北米プレートが糸魚川静岡構造線のところにまで達していることで決着がついた。

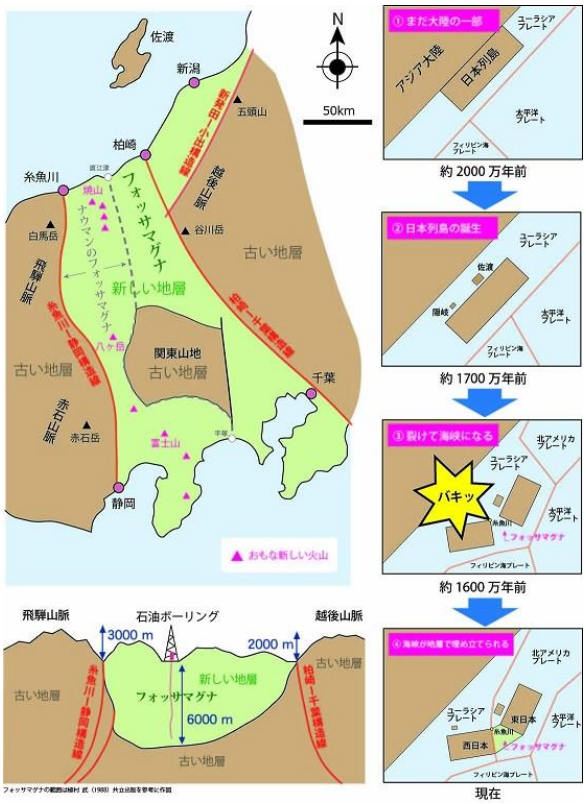
3. 山脈・山地の誕生

海洋プレートの沈み込みにより(海洋ﾌﾟﾚｰﾄの上にある)大陸プレートが大きな力を受け、これを源として造山運動が生起し、山脈・山地が形成される。山脈・山地の主軸(連なり方向)は沈み込み方向と同一方向になり、東日本と西日本では海岸線とでは山脈・山地の方向は海岸線と平行となっている。しかし、中部域では、フィリピン海プレートと太平洋プレートの両方から押される北米プレートの西側境界が南北となるために、地殻変動の主軸とともに生起する山脈もまた南北となり、海岸線と直交することになる。こうしてアルプスが生起し、立山連峰と後立山連峰とが塊となって3000m級になったといわれている。な両連峰の間の溝が黒部川である。

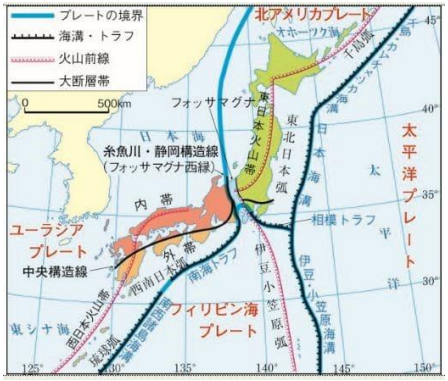
4. フォッサマグナ域と周辺域

ﾌｫｯｻﾏｸﾞﾅについて、その西端が糸魚川静岡構造線であり、東端が新潟から千葉までの構造線である。両構造線のうち糸魚川静岡構造線がユーラシアプレートと北米プレートの境界にあり、列島東西引き離しの原動力になったとみられている。

・西側の分断線；糸魚川静岡構造線
　　糸魚川、小谷、松本、諏訪、韮崎、静岡
・東側の分断線；新発田・小出構造線と柏崎・千葉構造線
　　他説；上越・伊豆構造線（北関東古生層含まず）
・深さ;6000m　　富士山は大陥没域に沸き上がる形で生起。



図A11 フォサマグナ概要図 ﾌｫｯｻﾏｸﾞﾅHP、ﾌｫｯｻﾏｸﾞﾅ資料館資料より
左：平面と断面の図　右：列島誕生模式図



図A12
日本周辺のプレート
日本のﾌﾟﾚｰﾄHPより

付録2 東日本と西日本の民俗事情

1. はじめに

北陸街道の親不知を論究すればするほど気になるプレートダイナミクスについて、日本列島の地形的東西二分断と文化的民俗的な東西特徴との関係性に興味がわき、ここで論究することにした。

日本を東と西に二分する分断線はどこにあるのか。いわずもがな、分断線北端は後立山連峰末端の親不知域や糸魚川域と明確であるが、南側の境界では北端部程の明確さはない。それでも東西は二分されている。そこには、地形学的に加えて地の利の要因(地勢的要因)も見え隠れする。

そこで、何がどのように関与して列島が二分され、東と西の各域が風土的･民俗的にどのような様相を呈しているか、整理することにした。

2. 東西日本の相違

(1)地域のくくり方；全国各地それぞれに個性があり、特徴がある。この場合の各地とは、市町村や県レベルであり、道州的レベルでもあり、いわゆる生活圏のくくり方で生み出される領域とする。このうちもっとも際立ったくくり方が日本を東と西とで分けることである。地域間相違には日本の東西間相違がベースになっていることが多いからである。そこで、そうした東西二分のくくり方で、日本文化の特徴、あるいは各地域の根源的な地域性の把握に努めることにした。

(2)東西間の境目

日本を東西に二分した場合、境目はどこなのか、なぜそうか、が問題となる。これには、地形的要因が一番であり、連山の存在や河川の存在がある。もちろん、技術の発達した近代ではそのような障害は完全に克服されていることはいうまでもない。

まず山について；連山が交易路の難所となると、難所を挟んで前領域路と後領域路とが分かれてしまい、生活の交流も円滑さを欠いてしまう。また人為的難所としては関所があり、これは山間部鞍部に設けられ、地形を利用して人為的に交流を制御･遮断する機能を持っている。

次に河川。大河川が関所の様と思うかもしれないが、平野の真ん中を流れる大河川は船による水上交易の要であり、渡河なら渡し舟で何てことはない(今は橋)。むしろ、関所の様相となる河川は、人里離れたど田舎のものである。

(3)東日本と西日本の盟主

東と西入分けた場合の各地域の盟主は、京都･大阪と東京である。歴史的には京都が日本の盟主であり、京都文化が各地に伝わり、各地を文化的地域にしていった。一方、新興勢力は西に対抗して東に栄え、逆に東の文化が西にも伝搬したが、文化が互いに交じり合っても根底部は交じり合うことはなかった。かくしていわゆる東西の境目が発生し、東と西でそれぞれの文化が関東文化や関西文化として独自性を保ちながら後世へと受け継がれていくといえる。

(4)生活面での様相

東西二分により交易が十分ならずとあらば、東西それぞれにおいて、食文化や言葉が独自に発展し、民俗的な差異が生ずるのは自然の理である。

3. 東西二分の境界線（節２の地質的展開）

東日本と西日本との区分けであれば、東京と京都の中間域に境界を設けることは二分論として妥当であり、境界線が地形的要因や地勢的な要因による交流不活発な所に定まる。この観点で境界線を考えてみよう。

・大規模断層線は(連山生起に関係するものの)連山そのものではないので、文化性二分の境界線とはなりにくい。

・連山による国境線は交易には難をもたらすので境界線として最適である。中部地方の北部と中央部はそれでよい。

・南部には境目となる明瞭な山が少ない。南部では地形的要因が関与するものの地勢模様がかかわってくる。ひとつの代案が河川である。

・結局、いくつか境界線が設定。状況に応じて使い分け。

ここに、境界線を３種記すことにする。

a. 断層；糸魚川静岡構造線（文化二分に適さず）

糸魚川‥‥大町‥‥松本‥‥諏訪‥‥韮崎‥‥静岡

b. 連山Ａ；北アと南ア及びその付近を通過の線

後立山連峰‥‥穂高連峰‥‥南アルプス連峰

以南は；矢作川説と知多半島の２説、

c. 連山Ｂ；滋賀と三重の域を通る線で二分

富山県東･南境界‥‥石川県東南境界‥‥

福井県東南境界‥‥滋賀県東境界‥‥不破関所

‥‥三重県鈴鹿‥‥三重県南部(伊勢湾に注ぐ)の川

なお、古代日本では奈良京都圏域の東側に関所付の境界を設け、関の内(関西)と外(関東)が区別された。その境界(区分線)とは越前の愛発関、美濃の不破関、伊勢の鈴鹿関の３つの関所を結んだ線である。これにより福井･石川･富山は関西圏外とされていたが、後世には関西圏に縁ありとして西日本域に属している。なお現在の関東は関は箱根関の事である。

図 A21　日本の東西区分線　日本全図 HP に加筆
橙色線が文化圏二分、緑線がﾌｧｵｯｻﾏｸﾞﾅ境界

4. 東と西の民俗的差異

東日本と西日本とでは文化に相違がある。これについて、食と言葉に着目して論ずる。下記には、東と西での相違を箇条書にする。各行にて左側が西を、右側が東をそれぞれ意味。

(1)言葉

地形：　谷、　　沢

言葉；　塩辛い、辛い　　しょっぱい
ｲﾝﾄﾈ：　言葉の後半で高く　前半で高く
例;雲の語；西では「く」より「も」が高く、東では「く」が高く

(2)食

味付；　薄味、　　濃味
餅　；　丸餅、　　角餅
豆腐：　絹豆腐、　　木綿豆腐
稲荷寿司；俵形、　　キツネ耳形
寿司；　五目巻き寿司、　握り寿司
汁粉；　こし餡、　　粒餡

(3)文化のルーツ

西日本は大陸文化(弥生文化)、
東日本は縄文文化、ｱｲﾇという説あり。

(4)食文化の背景、東日本についての一般論

東では新興勢力ゆえに普請・作事の仕事(社会基盤づくり)が多く、パワフルな労働が必要である。このため、濃い味が好まれる。しかも、大量の食事が入用となれば、手間暇かけず、味は繊細ならずである。無骨なたしなみが定着していく。

5. 富山の特殊性

東西文化の相違を念頭に置いて、西側文化圏である富山について、京文化との関係で論じてみよう。

(1)地形

中部山岳系が列島軸に直交。これが、アルプスを異常に高くかつ連山にさせ、富山平野の東部域に山岳地を屏風のようにそそり立たせ、富山以東の新潟域が遠避けられているかのようである。実際、親不知域において北アルプスが日本海に突き出しており、北陸街道の難所となっている。

(2)自然災害

・対地震；　「立山が地震から我らを守っている」といった立山信仰が今なお健在である。当時の方々が経験的にそう思ったのか神にすがりたかったのかは定かではないが、地震学からは以下のような理論根拠が最近出された。北アルプス黒部川(黒部ダム付近)直下に大規模マグマ溜りが確認され、このマグマだまりによって太平洋側で生起した地震はかなり勢力を弱めて富山に到来する。by 川崎先生(東濃地震研究所)

・対台風；

列島南岸域は台風の直撃域だが、富山に到来の台風は南岸域に上陸の後に勢力を多少落として富山に到来している。最近では、2010 年 10 月、大規模学会富山開催にて開催日１～２日前に富山直撃と予想されていた台風が富山の手前でわざわざ南に進路方向を変え(ていただい)た。これまた立山が守っているという信仰につながっている。

・対降雨；

富山は自然災害の少ないところ、というのが定着している。しかしながら、1969 年豪雨は富山に大被害をもたらした。とはいえ、富山では災害が少ないことは確かである。だからといって災害は怒らないということではない。これを認識したいものである。

(3)言葉

富山はいうに及ばず全国どこでも、ＴＶの普及とともに、標準語(東京言葉)が昔使っていた各地の方言を駆逐していった。今となっては昔の方言を知る由もないが、かつての富山言葉をまとめてみたい。

・相手を主とした用語；相手のところに行く場合、50～60 年前までは「あなたの家に来る」といっていた。今は「あなたの家に行く」である。この表現は富山独特な気がする。

・方言では語尾を簡略化している。「行きます」を「行くちゃ」、「そうなのです」を「そいが」。言葉の意味ある基幹部のみが明確に伝わるようにとのことか、基幹部以外どうでもいいということなのか、考えてみると面白い。

6. 諸分野での東西二分

諸分野に目を転じて東西二分の様子を垣間見る。

(1)　行政区分

・道州的区分；
　北海道、東北、関東、北陸、中部、東海、近畿、
　中国、四国、九州
・首都圏；茨木、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨
・広域関東圏；関東、甲信越(山梨、新潟、長野)
・広域首都圏；関東、甲信越、静岡、福島
・東西二分の境界
　東日本の西端：関東甲信越の西側
　西日本の東端：富山・岐阜・静岡の東側

(2)電気事業

・事業体が東西二分
　西日本の東端は
　北陸電(富山、石川、福井)と
　中部電(長野、静岡西、岐阜、
　　愛知、三重)。
　なお新潟は東電
・交流周波数で東西二分
　東日本 50Hz、西日本 60Hz

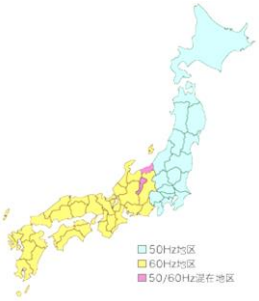


図 A22　電力の東西二分

　東西境界は富山の東側、長野の東側、富士川
　　境界線付近では、周波数の混在する地域あり。

(3)鉄道；東日本；JR 北海道、JR 東
　　中間　；JR 東海、東海は西にも東にも含まれず。
　　西日本；JR 西、JR 四国、JR 九州

7. おわりに

日本は伝統的京文化と近代的東京文化に二分され、各地域は東西の文化圏のいずれかに属して近代を迎えた。近年の東京文化が国内を席巻するにつれ、どこも変わらぬ風情や民俗の様相が定着している。伝統を守る京文化の盛り返しが大いに期待されるところである。

それにもうひとつ、二極の文化を基礎にした各地域固有に育まれてきた土着の文化をもっと掘り起こして、これを全国一律文化の対極としたいものである。すなわち、東日本と西日本に分けた文化構成のもとに、各地の文化をはぐくみ、これを歴史感ずる味わい深いものにしたい。実は列島二分論の背景としてそんなことを考えていた。皆さんいかがでしょう。

謝辞:執筆に際し、地形地質、ナチュラリスト、等専門家との談義を取材材料に活用させていただいた。記して謝意を表する。

付録3 生活感に基づいた歴史の捉え方

北陸街道の歴史展望を楽しんだので、そもそも歴史とは生活の上で気楽にどう向き合えばいいのかを考えたくなった。

1, はじめに　歴史といえば一般には支配層の政治史をさすためか、一般人にとって歴史はつまらないものという捉え方が多く、日常生活においては歴史に直に触れることはあまりない。トーンを落として歴史的というならば、歴史ドラマ(NHK大河ドラマ)や時代劇(銭形平次などの TV ドラマ)は楽しみの対象となることもあるが、歴史については「昔のことを知って何になる」といった認識が当たり前という実状かと思う。(そうでない場合ももちろん多いが)

ここでは、歴史とは結構面白いはずなのに皆さん何故歴史に疎遠なのか、そんな観点から歴史を楽しむには歴史の本来に分け入ることから始めるとして、歴史と生活の枠組みによる歴史の楽しみ方に論及する。すなわち、上述の観点で「楽しむための歴史」を生活歴史の面から論議したい。

2. 歴史に接する

2.1　学びの対象としての歴史　歴史なるものとの出会いは何といっても学校教育にある。小学校から高校まで学ぶ社会科「歴史」である。学びの最初の頃はさしたる困難もないが、学年が下るに従い、歴史イコール年号となってからは歴史嫌いが急増する。「歴史はそうじゃない」の声が霞んでしまう。

2.2　観光として触れる歴史　観光旅行では決まって名所旧跡を訪れる。そこでは、年号なんて関係なく、歴史遺産や歴史偉人について見たり聞いたりといったことを皆さん割合面白がっている。京都のお寺さん巡りや何やらは、学校教育でいう歴史ではなく観光でいう歴史なのである。これをもって、皆さんには歴史を受け入れる土壌が根底にあるといえる。

2.3　郷土にて触れる歴史　観光でいう歴史の捉え方は実に健康的である。これの延長線上として、郷土の歴史が好意的に受け入れられている。すなわち、郷土の歴史となると話は別で、自分らの街の歴史としての捉え方が自然と湧き上がってくる。例えば、街にある樹齢何百年の巨木とか旧街道の道とかが歴史としての街のアイデンティティとなり、またそんな事象を観光物語や歴史ドラマ仕立てにして楽しめる。

2.4　生活の中での歴史　観光や郷土と来るなら、当然ながら自分の世界にも日常的な歴史を宿しているはずである。すなわち、日常生活の場として「自宅」が歴史を背負っているといえる。小さい時の思い出や成長にあわせて家の中の設えや空間に年季が入り込んでくる。これが、我が家の歴史である。ここにご近所さんや親族が居れば、近所さん歴史や一門歴史が一帯に宿ることになり、ときには自分のルーツとしての歴史が花開いてくる。要は、生活の営みを刻めば、これが歴史となり、生活の充実は「歴史を楽しむこと」といえる。

2.5　ドラマ仕立ての歴史　住まいに居ながらにして歴史を楽しむことができるようになったのは(映画もあるが)TV 時代に入ってからである。TV では昔の時代における人間ドラマとしてつくられる歴史ドラマでは、(歴史ファンに限らず)一般の方々でも楽しんで鑑賞できる。さらにいえば、捕り物帳などサスペンスものもまた娯楽の歴史ドラマとして楽しめる。これをもって何となく無意識であっても歴史に触れていることになる。しかも、歴史ドラマがさりげなく見ていることで人を楽しませるならば、歴史を楽しんだといってもいい。

3.　歴史の意味　我ら歴史といったときに歴史をどう捉えているのであろうか。学校教育の歴史はさておき、街の歴史、ドラマ世界の歴史といった観点から歴史観をおさえよう。

3.1　歴史の本質　歴史ファンにとっては「昔のことを知って何するのか」といわれることが多い。そんな時、「温故知新や過去との対話です」と気取っていうこともあれば、「とにかく面白いでしょう」ということもある。最近は、街づくりのアイデンティティは歴史からという位置づけもある、と。このように歴史の位置づけは多種多様であるが、やはり歴史が過去から現在と未来をつないでいることを強調して「現在は過去の結果、未来は現在の延長」という捉え方が一番わかりやすく理解されやすいと考える。なお、そこにおける現在とは今ある環境や人間の存在と関係性をすべて込みにしている。

3.2　我らにとっての歴史とは　一般に歴史について、政治の視点から「支配層の歴史」イコール「世の中の歴史」といわれるとおり、為政者による支配のもとでの民衆が営む生活であれば、当然歴史は支配層中心の歴史となってしまう。しかしながら、例えば食や住まいなどの歴史的起源や変遷といったことなれば、民衆はこれを歴史と捉えて、生活環境の身近な点から歴史を大いに支えていることになる。

3.3　なぜ歴史が大事なのか　歴史が大事とよく言われているが、何がどう大事なのかと聞かれるとハタと困ることが多い。「〇〇年に何がどうなって、だからこうだって」というような説明はかえって難しい。その点、「街のアイデンティティや個性は歴史である」と言ってのけるのは割合容易であり、街の変化も歴史という捉え方が我らにとって一番しっくりする。例えば、身近な自分の街で小学校が新しくなったとか、ショッピングセンターができたとかいった事が自分たちの街の歴史になっている。

3.4　歴史の活用　歴史をなぜ学ぶのか。それは現代に役立てるためである。これには、「温故知新」や「過去の結果が現代」などの考えがある。以下、二点についてみよう。

第一の考えはビジネス書にみられる。ビジネスでは、人材活用、攻めの戦略、人心掌握などを戦国武将から学べとかいった本が多く出ている。これらは戦国武将の思考が現代に展開できることを前提に、戦国期に学べということである。確かに読んでいると面白いし、ビジネスにも(直接でなくても)ヒントとなるという。

第二の考えは、諸問題の解決に向けて己を知り相手を知ることから始め、現在の分析を過去からの時空間で検討するものである。例えば、紛争解決に向けては、現代の時点から大きく遡って歴史や風土の変遷をにらみながら、進むべき方向を探査することや相互尊重を図る手立てを練り上げれる。

4. おわりに　これ以降、歴史ドラマ、郷土史、街づくりウを扱いたい。歴史を気張らずに語ることが目的で作成した稿でもって生活におけるｿﾌｵﾀｯﾁな歴史愛好の一歩としたい。